

研究主題「『する・みる・支える・知る』楽しみ方を共有することができるマット運動の指導の工夫 －互いの違いから学び合う協働学習を通して－」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課
葛飾区立葛美中学校 主任教諭 小林 大輔

第1 研究のねらい

中学校学習指導要領（平成29年3月告示）保健体育の目標では、体育や保健の見方・考え方を働かせ、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することが示された。中学校学習指導要領解説保健体育編（平成29年7月）では、見方・考え方について、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」と示され、内容の取扱いについての配慮事項では、「体力や技能の程度、性別や障害の有無等にかかわらず、運動の多様な楽しみ方を共有することができるよう留意すること」が新たに示された。

マット運動は、他の領域の内容に比べると「できる」、「できない」がはっきりとした内容であるため、教員の指導は「知識及び技能」に関心が向きやすく、技の習得を目的とした個人の課題解決の取組や習熟度別の指導が多いと考えた。また、生徒は自己の技の習得の目標達成に意識が向きやすく、マット運動の楽しさや喜びを技の習得の一面でしか味わうことができていないと考えた。そこで、マット運動を通して、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力をバランスよく育成するためには、技の習得だけでなく、マット運動の多様な楽しみ方を共有する必要があると考えた。

第2 研究仮説

マット運動において、体力や技能の程度、性別や障害の有無等、違いのある生徒同士での協働学習を工夫することで、様々な違いを超えて運動の多様な楽しみ方を共有することができるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

中学校学習指導要領（平成29年3月告示）、中学校学習指導要領解説保健体育編（平成29年7月）及び小学校学習指導要領解説体育編（平成29年7月）に基づき、以下の内容を研究の基礎とした。

(1) 「する・みる・支える・知る」楽しさや喜びを味わわせる単元計画

「資質・能力」、「見方・考え方」及び「指導計画の作成と内容の取扱い」に基づき、実践研究における単元計画を具体化した。

(2) 体力や技能、性別、障害の有無等の違いを超えて運動の多様な楽しみ方を共有する指導

「障害のある生徒などへの学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫」、「運動が苦手な児童への配慮の例」に基づき、実践研究における運動の多様な楽しみ方を共有する指導を具体化した。

2 調査研究（平成30年7月実施）

都内公立中学校第2学年162人の生徒を対象に、器械運動領域「マット運動」の授業や保健

体育科の授業における男女共習の意識調査を行った。「体育の授業が好きですか」について肯定的な回答は76%だが、「マット運動の授業が好きですか」について肯定的な回答をした生徒は52%にとどまり、マット運動の多様な楽しみ方を十分に味わうことができていないと考えられる。マット運動の多様な楽しみ方を味わうためには、運動との関わり方「する・みる・支える・知る」の充実を図る必要がある。また、男女共習についての意識は、肯定的な回答が45%であった。肯定的な回答では、「技能の向上」、「助け合い」、「男女の違いを通じた学び合い」などが挙げられ、否定的な回答では、「恥ずかしい」、「からかわれる」、「体力の違い」が挙げられた。さらに、特別支援学級の生徒は、「嫌なことをされたり、言われたりするからかもしれない」等、不安を感じるとの意見が多かった。

3 開発研究

都内公立中学校第2学年6学級（特別支援学級を含む）を対象に、器械運動領域マット運動（全8時間）の検証授業を実施した。

グループ編成は、技能の程度に違いがある男女及び特別支援学級の生徒で構成した。

(1) 準備運動・補強運動の工夫

違いのある生徒同士での準備運動や補強運動（以下「グループアップ」と表記）では、運動の関わり方「する・支える」を主として、その内容にウォーミングアップだけでなく、生徒同士のコミュニケーションの充実を加えた（表1）。毎時間の導入で、グループアップを取り入れることにより、生徒同士の信頼関係を深め、仲間と助け合ったり教え合ったりするなど自主的に関わり合おうとする意思をもたせ、協働学習を促進させた。

第1時では、教員主導でグループアップの内容や方法を指導した。グループでのストレッチや基礎運動では、動きに違いがあることを気付かせるよう、「互いを見合うこと」を意識させた。第2時以降では、仲間と合意形成を図ろうとする意思をもたせるために、「考えを伝え合う」ことを意識させた。教員は生徒が協力したり、工夫したりした点を積極的に評価した。

表1 具体的なグループアップの内容例

① ランニング	アップテンポの曲をかけて裸足でランニングする。グループごとに1列に並び、先頭の生徒が自由にコースを決めて走る。先頭は、音楽に合わせて片足立ちで好きなポーズを自由に行い、後続の生徒はまねをする。ポーズをしたら先頭の生徒は交代する。音楽に合わせて数を数えるなど、楽しみながら行えるよう工夫する。
② ストレッチング	ゆったりとした曲に合わせて、チームで円になってストレッチングを行う。互いに動きを見合うことを意識させる。
③ ゆりかご	アップテンポの曲を使用し、ゆりかごを行う。音楽に合わせて拍数をとりながら、グループ全員が掛け声を出し、タイミングを合わせその場に起立する。グループごとに「大きなゆりかご、小さなゆりかご」を選択し、「そろえる、ずらす」等の方法を工夫させる。
④ 川とび	マットの中央に手をつけて、音楽に合わせてマットの横幅を跳び越える運動を行う。生徒同士で拍数をとって、グループでタイミングよく「そろえる、ずらす」基礎運動を行う。

(2) 自己の課題を発見させる発問設定

第2時から第4時では、運動との関わり方「みる・知る」を主として、自己の課題を発見させる発問を設定し、自己の課題把握や解決の方法について考えさせることを目的とした。

技のポイントや補助の仕方を確認し、知識を共有した上で学習カードを活用し、提示した動きのポイントと自己の動きを比較して、課題を見付けさせた。その後、自己の課題について言葉や文章で表し、仲間に伝える活動を取り入れることで見るポイントを焦点化させ、誰でも他者に助言できるようにした。その後、グループで課題解決のための協働学習を行った（表2）。

表2 具体的な発問例と意図

発問	意図
大きな前転ができる人との体の使い方の違いを考えよう。	連続技や大きな技につなぐために、 <u>回転力を生み出す身体の使い方を見付けさせる</u> 。また、小さな前転と大きな前転を通して自己の課題点を見付けさせる。
補助なしでも倒立できる人との違いを考えよう。	倒立を維持するためには、 <u>腹筋と背筋に力を入れ、身体を固定し、しっかりと手で支える必要がある</u> 。 <u>手の使い方、体の力の入れ方、視線、振り上げの勢い等に注目させ</u> 、自己の課題点を見付けさせる。
大きな側方倒立回転ができる人との違いを考えよう。	<u>振り上げる足のスピード、手を着く位置、手を着いたときの体と脇の角度を広げる、倒立の時間を長くすること等が必要なことを見付け</u> 、知識を基に自分との違いを見付けさせる。

(3) 発表会に向けた協働学習

単元後半（第5時から第7時）は、運動との関わり方「する・みる・支える・知る」の全てを取り入れた協働学習と発表会を行った。単元前半で築いた生徒相互の関係性を生かして、「互いの違いを生かし合うグループでの発表」を共通テーマとし、技や場の工夫を自由な発想で考えさせた。また、仲間の試技を補助したり、挑戦する技の課題解決に向けて助言したりすることは、自己の技能や仲間との連帯感を高めることにつながることを理解させた。発表会では、採点カードを準備し、「みる」楽しさを意識させた（図1）。

- ・規定技として学習した内容を入れる。補助があってもよい。
- ・互いの違いを生かし合えるように構成を考える。
- ・二人以上で技を「そろえる、ずらす」ことやマットの使い方や配置を工夫して演技する。
- ・発表の観点は、「互いの違いを生かし合えていたか」について生徒が採点する。

図1 具体的な発表方法例

4 検証授業の分析

生徒に毎時間、「形成的体育授業評価表」の9項目の内容を3件法で答えさせ、その平均点の変容から手だての有効性を分析した。

(1) グループアップの有効性

「仲間と仲良く協力して、学習することができましたか」については、第2時から第4時の各時間の平均は2.85点以上の回答であり、「楽しむことができましたか」についても高い平均点を示している（図2）。ワークシートの記述には、「男女の壁を超えるきっかけとなった。」（通常の学級の生徒）、「通常の学級の生徒と一緒に楽しく運動したことで自然と仲が深まった。」（特別支援学級の生徒）等の感想が見られた。以上のことから、グループアップは、違いのある生徒同士のコミュニケーションを円滑にし、協働学習をするための環境づくりの手だてとして有効であることが分かった。

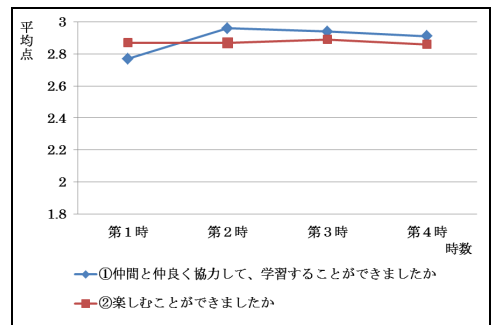


図2 グループアップの有効性

(2) 自己の課題を発見させる発問設定の有効性

「あっわかった、あっそうかと思ったことがありましたか」について、第2時から第4時の各時間の平均は2.7点以上であった。また、「仲間と互いに教え合ったり、助け合ったりしましたか」についても第2時から第4時の各時間の平均は、2.8点以上であった。自己の課題を発見させる発問を設定したことにより、生徒は自己の課題を常に意

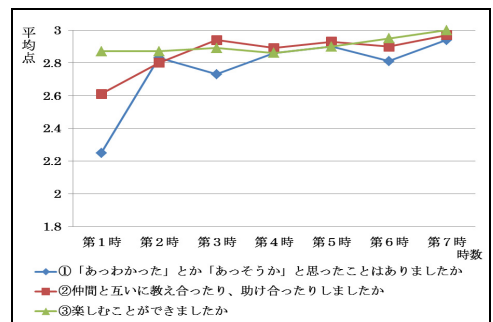


図3 自己の課題を発見させる発問設定の有効性

識しながら運動に取り組むとともに、自他の課題を共有したことで、互いに助言し合うことができ、単元を通して仲間と学び合うことができた（図3）。ワークシートの記述には、「いろいろな意見や見方があって『なるほど』と納得した。」等の感想が見られた。さらに、特別支援学級の生徒も、通常の学級の生徒に自ら手本を見せ、課題点を助言するなど、積極的に協働学習に関わることができた。以上のことから、発問設定の工夫は、互いの違いから学び合う意識を高め、課題解決のための協働学習をする手だてとして有効であることが分かった。

(3) 発表会に向けた協働学習の有効性

「深く心に残ることや、感動することはありましたか」、「今までできなかったことができるようになりましたか」について、第5時以降上昇した（図4）。「互いの違いを生かし合う」という共通の課題を設定し、生徒主体で発表会に向けた協働学習を行ったことで、生徒同士が主体的に助け合い、教え合うことができた。発表会では、互いの違いを生かした演技の構成を考え、技能の程度に応じて補助を

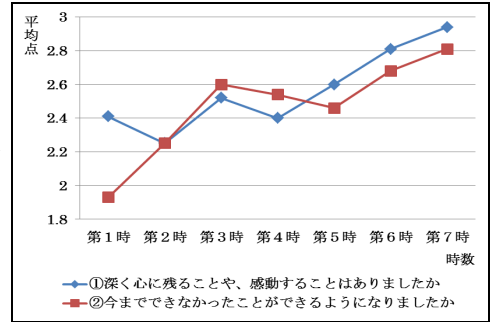


図4 発表会に向けた協働学習の有効性

を付したり、同じ技でも条件を変えたりするなど、一人一人の違いを大切に演技を発表することができた。以上のことから、共通の目標を設定し、協働学習に取り組ませたことは、グループの連帯感を高め、学ぶ意欲の向上につながる手だてとして有効であることが分かった。

(4) 授業アンケートの結果

授業前、授業後のアンケートに大きな変容が見られ、肯定的な回答が大幅に上昇した（表3）。特別支援学級の生徒7人についても「仲良く協力できて楽しかった。」、「通常の学級の生徒とまた一緒に学習したい。」等、全員が肯定的な回答であった。

表3 授業前、授業後アンケートの変容

アンケートの項目	授業前	授業後	授業前	授業後
あてはまる どちらかといえばあてはまる	マット運動の授業が好きである	78%	授業を男女一緒に行うことはよいことだと思う	94%
	52%	73%	45%	92%
	自分や仲間の課題解決のために話し合ったりする学習をしている	97%	自己の課題に挑戦し課題解決に向けて粘り強く取り組んでいる	92%
	73%	74%	74%	92%
マット運動で学んだことを、体育以外の場面で生かすことができる	80%	マット運動の楽しさや喜びを仲間と共有することができた	96%	
63%	80%		96%	

第4 研究の成果

単元計画に、運動との多様な関わり方「する・みる・支える・知る」と「グループアップ」、「発問の設定」、「発表会に向けた協働学習」の三つの手だてを意図的・計画的に設定したことで、生徒は違いを超えて多様な楽しみ方を共有することができた。

以上のことから、本研究が違いを超えてマット運動の「する・みる・支える・知る」多様な楽しみ方を共有することに有効な指導方法であったと考える。

第5 今後の課題

- ・ 自己の課題を発見させる発問設定では、教員が教える知識の量と生徒に思考させる内容とのバランスを考え、様々な生徒の学習状況に応じた発問を開発していく必要がある。
- ・ 本研究では、違いのある生徒同士が楽しみ方を共有できるよう、協働学習の三つの手だてと活動内容を開発したが、他の領域の内容についても開発していく。